

# やまと 民俗への招待

鹿谷 熟

翌朝、弥山の山頂は広々として明るかった。大峯奥駈道でこれだけの山上平原を持つ山は他にはいだらう。小屋の近くには、神明造り銅板葺きの弥山弁財天社が祀られていて。本殿の前の穴は天河神社まで続いている。

早朝5時半に出発し、金網で囲われたオオヤマレンゲ（大山蓮華）の自生地を過ぎ、6時20分すぎ、近畿最高峰の八経ヶ岳（1915m）、仏縁ヶ岳に立つ。さすがに周囲を見渡せる絶景の場所だった。三宝院・東南院・桜本坊・千光寺・臺藏院・山形帰命院の碑伝（木札）があり、6~7

月にかけて山伏のグループが次々とここを通ったことが分かる。

旧大塔村篠原に下る弥山の辻、禪師の森、舟のタワを過ぎて8時40分にようやく休憩。タワとは山の稜線が低くたわんだ所。楊子ケ宿跡を経て10時すぎに仏生ケ岳、さら

に11時に孔雀宿跡で昼食。ご飯が喉を通りない。

お茶でなんとか流し込む。孔雀岳を経て正午すぎに「西部分け」を通過する。大峯山系を仏教世界として、ここから北が金剛界、南が胎藏界だと

いう。

次は日本一の靈場となる积迦ケ岳（1800m）だ。急な岩山をかじりつくようにして、必死の思いで登った。役に立つた。

山中で最強の強力とされ、怪力と酒好きで「オニ雅」と畏敬されていた



积迦ケ岳山頂で踏査の一一行と（前列右から4人目が筆者）  
=2001年撮影、筆者提供

水や食べ物を振る舞ってくれたのが、十津川村教育委の中西康廣さんだった。身一つでさえ大変なのに、重い一斗缶を担いで登ったことに驚いた。

しかし、驚きはそれだけではなかった。記念写真の背後に立つ积迦如来立像を1924年に担いで登った話だった。大峯

この後、不思議な静寂さと平穏さが漂う深仙宿から大日岳を経て、3時間には太古の辻に着き、これから岩が転がる谷を前鬼に下った。疲労困憊のなか、ポケットにいた黒砂糖を頬張りながら歩いた。食べると急に元気が出た。

## よくぞここまでへ积迦像を

岡田雅行（1886~1970）が、37歳の夏に単独で、部品全部を少しずつ段階的に上げてゆく「送り持ち」で担ぎ上げたという。台座の裏側に小さな文字で「此尊像ハ天川村住人法明院岡田雅行獨力ニテ運搬セシ者ナリ」と刻まれている。

岡田雅行（1886~1970）が、37歳の夏に単独で、部品全部を少しずつ段階的に上げてゆく「送り持ち」で担ぎ上げたという。台座の裏側に小さな文字で「此尊像ハ天川村住人法明院岡田雅行獨力ニテ運搬セシ者ナリ」と刻まれている。

この後、不思議な静寂さと平穏さが漂う深仙宿から大日岳を経て、3時間には太古の辻に着き、これから岩が転がる谷を前鬼に下った。疲労困憊のなか、ポケットにいた黒砂糖を頬張りながら歩いた。食べると急に元気が出た。

（奈良民俗文化研究所代  
表）

この後、不思議な静寂さと平穏さが漂う深仙宿から大日岳を経て、3時間には太古の辻に着き、これから岩が転がる谷を前鬼に下った。疲労困憊のなか、ポケットにいた黒砂糖を頬張りながら歩いた。食べると急に元気が出た。